HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「我が祖国」への想像力 : ドイツ系多数地域におけるチェコ・ソコルの活動
Author(s)	福田, 宏
Citation	スラヴ研究, 49, 29-50
Issue Date	2002
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38977
Type	departmental bulletin paper
File Information	49-002.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「我が祖国」への想像力
―― ドイツ系多数地域におけるチェコ・ソコルの活動 ――

福田　宏

はじめに

1896年11月14日の夜。プラハ郊外のナーロドニー・ドゥーム（ネイション[1]の家）では「フュグネルの夕べ」と題する体操協会ソコル (Sokol)[2]の集会が行われていた。この日のテーマは、タイトルからも分かるとおり、1862年にソコルを創設した立役者の一人、フュグネル (Jindřich Fügner, 1822-1864) の功績を讃えることであったが、目的はそれだけではなかった。この会合においては、ドイツ系多数地域に設置されたソコル協会を支援し、当地に居住するチェコ人を「ゲルマン化の危険」から救い出そう、という主張もなされたのである[3]。いわゆる「脅かされた地域」に対するアピールがソコル運動において大々的に行われたのは、この集会が初めてであった。当時、機関誌『ソコル』の編集長であったシャイネル (Josef E. Scheiner, 1861-1932) は、以下のような演説を行っている。

> ……様々な手段によって、あるいは様々なルートを通じて異質な要素が入り込む民族 (národnostní) 境界地域では、これ以上、チェコの身体 (tělo) に異質なものが入り込まないように断固たる抵抗運動が行われ続けています。異質なものの侵入は、チェコ的なものの解体と破壊にまさに直結しているからです。チェコ的なものの堕落は、チェコ民族の非ネイション化であり、抑圧であり、ドイツ化の進行を意味しています。それは、我々の民 (lid) から物質的な力が体系的に搾取され、吸い取られていくことでもあります。つまるところそれは、我々の民の退化と退廃へとつながっているのです。

1　B. アンダーソンが指摘したように、ネイションという共同体を想像する行為は非常に近代的な現象である。B. アンダーソン著、白石隆、白石さや訳『増補 想像の共同体 ―― ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年。歴史的要素やエスニックな要素にしても、それらはネイションが創り出される過程において「発見」され、もしくは「援用」されてきたものであった。チェコ人の場合であれば、そうした要素に当たるのはボヘミア国権に基づく歴史的領土であり、チェコ語に基づく言語集団であろう。また、このネイションには、チェコ社会を自律的な人間によって構成される市民的共同体として構築していこうとする要素も含まれていたはずである。その点では、チェコ人というネイション概念には、少なくとも、歴史的要素、エスニックな要素、市民的要素、の三つの要素が混在していたということになろう。本稿においては、概念のこうした「多義性」を強調するために、národ (Nation) を「ネイション」と表記することにしたい。ただし、エスニックな意味合いの強い národnost (Nationalität) については「民族」と表記する。

　なお、本稿においてはほとんど紹介できないものの、ソコル機関誌においては、フランス革命のスローガンである「自由・平等・友愛」がしばしば取り上げられ、その理念に基づいて「高貴なる人間」を育成するいう目的が強調されたのであった。典型的な例としては以下を参照。 F. Mašek, “Volnost, rovnost, bratrství !” *Sokol* 24:2 (1898), pp.25-28; 24:3, pp.49-51; 24:5, pp.101-105. もちろん、「高貴なる人間」の中味については検証が必要ではあるが、ソコル運動においても、市民的共同体としてのネイションが提示されていたと考えることはできよう。

2　ソコルとは、チェコ語で鷹（タカ）を意味する単語である。

3　“Oslavení Fügnerovy památky v Praze,” *Sokol* 22:16 (1896), pp.319-321.

また、この集会には、北西ボヘミアに位置するドゥフツォフ (Duchcov, Dux) のソコル協会から一人の炭坑夫、F. プロハースカがゲストとして招かれていた。盛大な拍手によって迎えられた彼は、聴衆に向かって訴えかける。

> ……この13年間、ドゥフツォフ・ソコルを訪れた［チェコ系多数地域からの］ゲストはわずか3人でした。皆さんは私たちのことを避け、私たちの地域を孤立させてしまっています。私たちはネイションとしての自らの信念を守るために戦い、苦しんでいる、というのに。つらく悲しいことです。……どうか皆さん、私たちのところにいらっしゃってください。皆さんの訪問は、いくらかの金銭的な支援よりもずっと私たちにとっての喜びとなるのです。（長く続く拍手、万歳の声、話し手への賛辞）皆さん！　皆さんのご厚意に感謝いたします。皆さんのお気持ち、確かに受け取りました。万歳！（嵐のような拍手、万歳！）

プラハのソコル会員たちとチェコ系少数地域のソコル会員が出会い、お互いにネイションの「同胞」であることを確認しあう。この記事においては、それは感動的な出来事として描写されている。だが、物理的に離れた地域 —— たとえ、その地域が「我が祖国」の一部として表象されていたとしても —— に居住する人間を「我が同胞」と認識し、具体的な顔を持った存在としてイメージする、という現象は非常に新しいものであったように思われる。確かに、ボヘミア王冠の土地 (Země koruny české) 、すなわちボヘミア王国領、モラヴィア辺境伯領、シレジア大公領を含むチェコ諸領邦 (České země) という領域概念は、チェコのナショナリズムにおいては重要であった。少なくとも19世紀後半においては、チェコ諸領邦はネイション固有の土地である、という神話が成立していたのも事実である。

だが、当時においてもボヘミア、モラヴィア、シレジアの間を越える一体感が実際に醸成されていたわけではなく、しかも、ボヘミア内部についても、歴史的領域の隅々に至るまで「我々の同胞」が居住しているという具体的なイメージは存在していなかった。コミュニケーション手段が発達しつつあったとはいえ、プラハを中心とするチェコ系多数地域のチェコ人にとって、ボヘミア北部から西部にかけての地域、あるいは南部のドイツ系多数地域は、「我が祖国」として表象されながらも、実際にはまだまだ縁遠い存在だったのである。しかしながら、19世紀末より、少数地域を支援する学校財団 (Matice školská) やネイション協会 (národní jednota) が設立され、それに伴って、チェコ系少数地域の問題を「我々全体にとっての問題」へと昇格させる言説が増加したのであった(4)。ソコルもまた、こうした流れの中でドイツ系多数地域に対して大きな関心を持つようになり、この地域に住むチェコ人をドイツ人からの攻撃を阻止する「歩哨」として位置づける言説を積極的に発信し始めたのである。本稿において着目するのは、まさにこの点である。

具体的には、まず第一に、ソコルがなぜドイツ系多数地域における組織化を積極的に始めたのか、という点について考察し（第3章・第4章）、第二に、ソコルが実際にチェコ系少数派を組織化するに当たってどのような方法を採ったのか、また、どのようにしてチェコ系多数地域との連帯感を生み出そうとしていたのか（第5章）、について具体的に追っていく

4　典型的な例として以下のものが挙げられる。Rudolf Havlíček, “Naše národní situace (Přehled národnostních poměrů našich),” *Naše doba* 21 (1914), p.25.

ことにしたい。ただし、本論に先立つ第1章では、従来のソコル研究について概観し、続く第2章では、19世紀後半のチェコ社会において、ドイツ系多数地域のチェコ系少数派に対する関心が高まりつつあったことを紹介し、実際、ソコルが本格的な支援を始める前の段階において、そうした地域の少数派を支援する組織が設立されていたという点を指摘しておくことにしたい。

1．ソコル研究の動向

チェコ・ナショナリズムにおけるソコルの重要性については、数多くの歴史家によって指摘されているものの[5]、それを正面から扱ったものは少なく、ソコル創設者の一人であるティルシュ (Miroslav Tyrš, 1832-1884) に焦点を当てたノルテ（アメリカ合衆国）の業績以外には目立った研究はない[6]。戦間期のチェコスロヴァキア（当時）においては、ソコル運動の当事者によるものが数多く著されているが、いずれも宣伝の要素が強い資料である。また、第二次世界大戦後には体育史の専門家による研究が開始されたものの、そこでは、労働者体操運動がメインであり、ソコル運動の発展過程はもっぱら「ブルジョア的反動への逸脱」として扱われている[7]。1989年の「ビロード革命」以降においては、ソコルの社会的機能に着目した著作も散見されるようになったが[8]、マルクス主義史観だけに限定されない体操運動史の構築は、まだこれからといったところである。

また、チェコ系少数地域に対するソコルの支援活動を扱った研究は皆無に近い状況にある。だが、ソコルが室内だけではなく野外でのパフォーマンスを行う組織であった、という点を考えれば、境界地域や混住地域におけるソコルの重要性は明らかであろう。特に、ドイツ語話者が多数を占める都市で行われる数千名規模のパレードや公開体操は、チェコ人の存在を誇示するものとして重要視されていた[9]。普段は、ドイツ系住民の眼を気にして地下室

5　例えば以下を参照。 Hans Kohn, *Pan-Slavism: Its History and Ideology* (New York: Vintage Books, 1960), p.232.

6　Claire E. Nolte, “Training for National Maturity: Miroslav Tyrš and the Origins of the Czech Sokol, 1862-1884.” Ph.D. Dissertation (Columbia University, 1990); Idem, “ ‘Our Task, Direction and Goal’: The Development of the Sokol National Program to World War I,” in Ferdinand Seibt, ed., *Vereinswesen und Geschichtspflege in den böhmischen Ländern* (München: R. Oldenbourg, 1986), pp.123-138. また、以下の拙稿を参照。福田宏「ソコルと国民形成 —— チェコスロヴァキアにおける体操運動」有賀郁敏編 『スポーツ』（近代ヨーロッパの探究8）ミネルヴァ書房、近刊 ; 同「チェコにおける体操運動とネイション —— ナショナル・シンボルをめぐる闘争」『東欧史研究』掲載予定。なお、日本において初めてソコルを扱った研究論文として、 功刀俊雄 「初期ソコル運動の方針をめぐって」『東欧史研究』 7号、1984年、87-106頁、が挙げられる。

7　典型的な例としては以下の二点が挙げられる。 Vilém Mucha, *K dějinám dělnického tělovýchovného hnutí* (Praha: Orbis, 1953); *Sto deset let Sokola 1862-1972* (Praha: Olympia, 1973).

8　例えば、チェコ社会におけるソコル運動の意義を扱ったものとして以下の論文集が挙げられる。Marek Waic et al., *Sokol v české společnosti 1862-1938 (Sokol in der tschechischen Gesellschaft)* (Praha: FTVS UK, 1996/97). なお、短いながらもソコル運動を概観したものとして *Jan Novotný, Sokol v životě národa* (*Slovo k historii*, No.25) (Praha: Melantrich, 1990) が有用である。文献目録としては以下のものが挙げられる。Přemysl Ježek, *Česká knižní tělovýchovná literatura od první poloviny 19 století až do roku 1918* (Praha: SPN, 1968).

9　祭典分析の観点から初期のソコルを扱ったものとして Jan Novotný, “Slavnosti Sokola pražského,” *Documenta Pragensia* 12 (1995), pp.223-228 が挙げられる。ドイツ体操の祭典を扱ったものとしては以

のような「劣悪な環境でひっそりと」体操し、ソコル会員であることを隠して生活しているような状況であっても、祭典の日には、プラハを中心とする地域から多数のメンバーが集結し、街の中は、ガリバルディの赤シャツを模したソコルのユニフォームで一色となったのだという。また、意図的にチェコ系とドイツ系の境界地域や混住地域を選んで行われる遠足も、当局を悩ませるものであった(10)。千名を越える赤いユニフォーム姿のソコル会員、あるいはソコル所属の騎馬隊がドイツ系多数地域へと行う遠足は、少数派のチェコ系住民にネイションの一員として生きる自信を与えることを期待されていたのである。もちろん、ドイツ系の体操家たちも、街頭でのパレードや体操、そして遠足を行うことによってチェコ系勢力を牽制し、ドイツ系の「同胞」を鼓舞しようとしていたのであった。こうした体操運動の実態については、依然として研究が不足しているのである(11)。

2.「救うべき同胞」の発見 —— ドイツ系多数地域の位置づけ

2.1　言語とネイション

1892年末、プラハ市議会が街路表示をすべてチェコ語の表記に一本化することを決定したのに対し、ドイツ人勢力が反発し、201軒の家屋に自分自身でドイツ語の街路表示板を取り付けるといった事件が発生している(12)。この一件に代表されるように、当時におけるチェ

下の文献がある。Dieter Düding, “Nationale Oppositionsfeste der Turner, Sänger und Schützen im 19. Jahrhundert,” in D. Düding, Peter Friedemann and Paul Münch, eds., *Öffentliche Festkultur: politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg* (Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 1988), pp.166-190; ジョージ・L. モッセ著、佐藤卓己、佐藤八寿子訳『大衆の国民化 —— ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』（パルマケイア叢書１）柏書房、1994年、135-144頁。

10　例えば、以下の内務省文書には当局の困惑がよく表れている。SÚA [Státní ústřední archiv 国立中央文書館], PM [Prezídium českého místodržitelství ボヘミア総督本部], 1891-1900, Inv.č.9101, Karton 2522, Sign. 8/5/20/1 (1897): 6142/ M.I., Wien, am 19. Februar 1897; Z. 17763, Starkenbach, am 6. August 1897; Z. 28598, Mies, am 22. September 1897. なお、1911年以降の事例においては、ソコルの遠足がドイツ系多数地域を通過したり、ドイツ系体操団体の遠足と日程が重なる際に「不測の事態」に備えて警官隊が配置されたケースが散見される。SÚA, PM, 1911-1920, Inv.č.23188, Sign.8/5/13/28, Karton 5329: Exh. Nr.10897, K.k.Landesgendarmeriekommando Nr.2, Prag, am 10. IX 1913); PM, 1911-1920, Inv.č.23522, Sign.8/5/17/85, Karton 5334: K.k.Bezirkshauptmannschaft in Prachatitz, am 30. Mai 1914; K.k.Bezirkshauptmannschaft in Prachatitz, am 2. Juni 1914.

11　なお、当時のチェコ社会におけるチェコ人＝ドイツ人関係一般については、以下のクシェンの研究をまず第一に挙げねばならない。 Jan Křen, *Konfliktní společenství Češi a Němci 1780-1918* (Praha: Academia, 1990) [*Die Konfliktgemeinschaft: Tschechen und Deutsche in den böhmischen Ländern 1780-1918* (München, 1993), trans. by Peter Heumos]. また、チェコ社会におけるドイツ人イメージの変遷を扱った次の論文集も重要である。Jan Křen and Eva Broklová, eds., *Obraz Němců, Rakouska a Německa v české společnosti 19. a 20. století* (Praha: Karolinum, 1998). また、プラハに限定した研究ではあるが、ドイツ系、チェコ系、ユダヤ系という三者の関係性を前提にしてドイツ人のナショナリズムを扱った Gary B. Cohen, *The Politics of Ethnic Survival: Germans in Prague 1861-1914* (Princeton University Press, 1981) やユダヤ人問題を扱った Hillel J. Kieval, *The Making of Czech Jewry: National Conflict and Jewish Society in Bohemia 1870-1918* (Oxford Univ. Press, 1988) は有用である。なお、チェコ歴史学の動向については、以下の諸論文を参照。篠原琢「チェコの19世紀をめぐって —— 自己表象の歴史学」『東欧史研究』19号、1997年、65-73頁；Jiří Kořalka, “Historiography of the Countries of Eastern Europe: Czechoslovakia,” *American Historical Review* 97:4 (1992), pp.1026-1040.

12　Elizabeth Wiskemann, *Czechs and Germans: A Study of the Struggle in the Historic Provinces of Bohemia and Moravia* (New York: St. Martin’s Press, 1967 [first published in 1938]), p.217.

コ人とドイツ人の対立は主として言語の問題として立ち現れるようになっていたと言えるだろう。そうした状況のなかで、行政的観点から行われていたはずの国勢調査とそれに付随する言語統計もまた、政治的な問題として認識されるようになったのである[13]。

もちろん、当局は、言語統計がネイション対立に利用される危険性を自覚していたし、「日常語 (Umgangssprache)[14]」を基準とするこの調査によって個人の民族 (Nationalität) への帰属が明らかになるわけではないと再三、主張していたが、言語統計が民族統計と同一視され、調査自体が各ネイションの数量を競う場へと移行していくのを止めることはできなかった。チェコ人とドイツ人の間では、10年ごとに行われる国勢調査において、いかに多くの「ボヘミア語＝モラヴィア語＝スロヴァキア語話者」[15]、あるいは「ドイツ語話者」を獲得するのか、という競争が行われるようになったのである。そして、19世紀末に力を持った社会ダーウィニズムもまた、この争いに拍車をかけることとなった。例えば、プラハ大学のドイツ語部門において統計学を教えていたラウヒベルク (Heinrich Rauchberg) は、国勢調査を「ネイションの力試し (Kraftprobe)」の場と捉えている[16]。彼によれば、数は「自らの強さと財産」を誇示する為の手段であった。ドイツ語話者の増加は、ドイツ・ネイションの発展を意味し、ドイツ語話者の減少は、ドイツ・ネイションの衰退を意味すると考えられるようになったのである。

また、10年ごとに行われる「日常語」の調査は、言語とネイションを同一視させる効果を生みだしただけでなく、それまでチェコ人やドイツ人といった意識を持っていなかった人びとにもネイションとしての自覚を持たせる役割を果たしたのであった。調査が行われるときには、ビラ、看板、新聞、あるいは集会といった手段により、「日常語」申告の重要性が説かれ、普段はチェコ語を使っているにもかかわらず、社会的地位や子供の出世のためにドイツ語で申告するような人間は、「ネイションの裏切り者」として断罪されたのである。

---

13 E. J. ホブズボーム著、浜林正夫、嶋田耕也、庄司信訳『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店、2001年、120-129頁；大津留厚『ハプスブルクの実験 —— 多文化共存を目指して』中公新書（1223）、1995年、46-79頁；Emil Brix, *Die Umgangssprachen in Altösterreich zwischen Agitation und Assimilation: die Sprachenstatistik in den zisleithanischen Volkszählungen 1880 bis 1910* (Wien: Böhlau, 1982), pp.76, 90.

14 ネイション対立の場においては、この「日常語」という基準自体が争点となっていた。チェコ語話者をはじめとする非ドイツ語話者は、「日常語」が公平な基準ではないと主張していたからである。公的な場においては社会的に優位な地位を持っているドイツ語が用いられることが多く、非ドイツ語話者の数が少なくカウントされてしまう傾向が生じる、というのがその理由であった。こうしたことから、「日常語」をあくまで擁護するドイツ人に対し、チェコ人は、母語、あるいは民族 (Nationalität) による統計調査の導入を要求する、という対立の構図が出来上がったのである。Brix, *Die Umgangssprachen*, esp. pp.100-101, 251-321, 490-493 （前注13参照）.

15 調査項目においては、「チェコ語 (Tschechisch)」ではなく「ボヘミア語＝モラヴィア語＝スロヴァキア語 (Böhmisch=Mährisch=Slowakisch)」という選択肢が用意されていた。コジャルカの推測によれば、当局が「チェコ語」という選択肢を用意しなかったのは、このカテゴリーがチェコ諸領邦全体にまたがる一体的なチェコ・ネイションの存在をイメージさせ、ボヘミア国権の主張に正当性を与えてしまうことを恐れたためであった。Jiří Kořalka, *Češi v habsburské říši a v Evropě 1815-1914: Sociálněhistorické souvislosti vytváření novodobého národa a národnostní otázky v českých zemích* (Praha: Argo, 1996) [*Tschechen im Habsburgerreich und in Europa 1815-1914* (München: R.Oldenbourg, 1991). trans. and revised by the Author], pp.49-50, 62; cf. Brix, *Die Umgangssprachen*, p.110 （前注13参照）.

16 Quoted in Brix, *Die Umgangssprachen*, p.425 (前注13参照).

さらに、国勢調査は地理的に離れたネイションの構成員を「我が同胞」として「発見」させる機能も果たしたのであった。特に、ボヘミア北部の繊維工業地域や同北西部の炭坑地域において、チェコ系の労働者や女中が、ドイツ系の資本家や家長から「日常語」を「ドイツ語」として申告するように圧力をかけられた、という類の「事件」が多数発生し、それが、プラハを中心とするチェコ人の反発を呼び起こしたのであった(17)。チェコ系エリートたちは、ドイツ系多数地域に居住するチェコ語話者を「ゲルマン化の波にさらされている我々の同胞」と規定し、彼らを「救う」べく様々なキャンペーン活動を開始したのである。また、当局の国勢調査を信用しないチェコ系エリートたちは、自らの手で私的調査を行い、当局による言語調査においていかに多くのチェコ人たちがドイツ人として不当にカウントされているか、という点を証明しようとしていたのであった(18)。

ここで、「チェコ人」や「ドイツ人」という表記について補足しておくことにしよう。すでに明らかなように、1880年以降のツィスライタニア（オーストリア＝ハンガリー二重君主国のオーストリア側）ではネイションを判断する基準として「日常語」しか設定されておらず、公式には「ボヘミア語＝モラヴィア語＝スロヴァキア語話者」と「ドイツ語話者」の区別しか存在していなかった。その点では、19世紀末におけるボヘミアの住民を「チェコ人」と「ドイツ人」に区分することは不可能である。だが、高まるナショナリズムの中にあっては、「日常語」の申告が「ネイション意識」の表明と見なされるようになったこともある程度は事実である。結局のところ、当時の社会を記述するにあたっては、言語統計の問題性を意識しながらも、「チェコ人」や「ドイツ人」という表記を用いていくしか方法はない。本稿においては、引き続き「チェコ人」や「ドイツ人」という用語を用いていくが、それはあくまで便宜的なものであるという点をここで断っておきたい。

2.2　学校財団とネイション協会

ドイツ語とチェコ語の境界地域、あるいは混住地域において、自らの「同胞」を支援する活動を1880年代に開始したのは、チェコ系ではなくドイツ系結社の方が先であった。1879年に「鉄の環」と呼ばれるターフェ内閣が成立し、野党の地位に転落したドイツ系自由派は、自分たちドイツ人が不当に扱われ、チェコ人などのスラヴ系ネイションが優遇されているという気持ちを抱くようになっていた。また、二重君主国がスラヴ的要素の強いボスニア＝ヘルツェゴヴィナを占領したこと（1878年）、シュトレマイアー言語令の実施（1880年4月）など、チェコ語話者にとって有利な政策がターフェ内閣において次々と実施されたことへの不満も存在したことであろう。その結果、それまでのドイツ系自由派を中心とするエリートたちは、いわゆる「保護協会 (Schützenverein)」を創設し、境界地域や混住地域におけるドイツ語話者の利益を守る方向へと向かっていく。その典型的な例が、シュトレマイ

17　Kořalka, *Češi v habsburské říši*, pp.147-148（前注15参照）．逆に、プラハ市内においては、国勢調査の前に、両ネイションによる活発なキャンペーンが行われたこともあり、意に反する「日常語」の申告を強制されたという事件は少なかったという。Cohen, *The Politics of Ethnic Survival,* pp.90-91（前注11参照）.

18　Jan Havránek, “Češi v severočeských a západočeských městech v letech 1880-1930,” *Ústecký sborník historický* (1979), p.241; Jan Měchýř, “České národní menšinové školství v Čechách 1867-1914,” in Zdeněk Kárník, ed., *Sborník k problematice multietnicity: České země jako multietnická společnost: Češi, Němci a Židé ve společenském životě českých zemí 1848-1918* (Praha: Filozofická fakulta UK, 1996), pp.80-81, n.5.

アー言語令の直後に創設されたドイツ学校協会 (Deutscher Schulverein) であった。その数ヶ月後には、チェコ系エリートも中央学校財団 (Ú.M.Š, Ústřední Matice školská) を設立し、混住地域における学校支援の活動を本格的に開始したのである[19]。

両者が目的としていたのは、ドイツ語話者、あるいはチェコ語話者の児童数が40名に満たず、公立学校の設置要件をクリアできない地域において、ドイツ語、又はチェコ語を教育語とする私立学校を設置・支援することであった。さらに、より広範な少数地域支援を行うために、ボヘミア南部を対象としたドイツ・ベーマーヴァルト同盟 (Deutscher Böhmerwaldbund) が1884年に設立されたのに対抗して、チェコ系のシュマヴァ・ネイション協会 (N.J.P., Národní Jednota pošumavská) が同年に、翌85年には北ボヘミア・ネイション協会 (N.J.S., Národní Jednota severočeská) が設立されたのであった。チェコ系とドイツ系のエリートたちは競い合うようにして、境界地域や混住地域にこうした組織の支部を設置し、ボヘミア、そしてチェコ諸領邦の隅々まで行き渡る支援のネットワークを構築しようと努力していたのである[20]。

例えば、南ボヘミアを対象としたチェコ系のシュマヴァ・ネイション協会は、中央学校財団と共同で私立学校の支援活動を行う一方、ドイツ系住民の「圧力」に対する保護、図書室や劇場の設立、講義などの実施、ナーロドニー・ドゥームと呼ばれるチェコ系結社用の建物の建設、クリスマスの贈り物、といった活動を行っていた。1913年の時点においては、同協会は32の小学校(obecná škola)、9の幼稚園、合計で4,041名の児童を支援していたし、1914年までには、延べ18,000回の講演会を行い、合計で25万冊以上の本を700の図書室に寄贈したという[21]。

また、同じく南ボヘミアを対象とするドイツ・ベーマーヴァルト同盟も、「スラヴの海で溺れそうになっている」ドイツ系住民を「救済」するために積極的な支援活動を行っていた[22]。チェコ語地域と接するドイツ語地域は「前線」と位置づけられ、そこに住むドイツ系住民は、ボヘミア人やブドヴァイス人といった意識ではなくドイツ人というアイデンティティを持つべきとされた。そして、「我々の土地」についての「正確な知識」を得るために地図が作製され、そこにおける「ドイツ的風土」の強調、チェコ化されてしまった地名の「訂正」、国勢調査における「ナショナルな財産 (Nationalbesitzstand)」の保持 —— ドイツ語話者数の確保 —— といったキャンペーンが行われていたのである。

こうした活動から伺えるように、言語境界地域や混合地域のチェコ語話者、あるいはドイツ語話者を「同胞」として描き出すレトリックや、その「同胞」を支援する具体的な方法に

---

19 Václav Kukaň, *Národnostní boje v Čechách: české menšiny a český národ* (Praha, 1900), pp.23-25.

20 いわゆる「保護協会」については以下の文献を参照。Měchýř, "České národní menšinové školství"（前注18参照); Davide Zaffi and Roman Zaoral, "Ethnicity Policy in School-Associations: Two Case Studies from the Austro-Hungarian Monarchy (1880-1900)," in László Kontler, ed., *Pride and Prejudice: National Stereotypes in 19th and 20th Century Europe East to West* (Budapest: Central European University, 1995), pp.53-66; Pieter M. Judson, "Frontiers, Islands, Forests, Stones: Mapping the Geography of a German Identity in the Habsburg Monarchy, 1848-1900," in Patricia Yaeger, ed., *The Geography of Identity* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1996), pp.382-406.

21 *Ottův slovník naučný nové doby: dodatky k velikému Ottovu slovníku naučnému* (Praha, 1930-1940), vol.4, part 1, p.455.

22 Judson, "Frontiers," pp.397-401（前注20参照）.

ついては、チェコ系やドイツ系の「保護協会」によって1880年代の段階で確立されていたといえるだろう。ソコルによる少数派支援の活動は、「保護協会」が創りだしたこうした流れに棹さす形で始まったのであった。

3．ドイツ系多数地域とソコル運動

3.1 支援活動のきっかけ

ソコルによるチェコ系少数派支援の活動において、指導的な役割を果たしていたのはヴァーツラフ・クカニ (Václav Kukaň, 1859-1925) である[23]。青年チェコ党系の日刊紙『ナーロドニー・リスティ』の編集部で働いていた彼が、どのような事情からチェコ系少数派のために「身も心も捧げる」ようになったのかは明らかではない。だが、クカニという一会員の「献身的」な努力がきっかけであったにせよ、ソコルがチェコ系少数派に対する組織的な支援を1896年から本格化させたというのは事実であった。ここでは主としてクカニの説明に依拠しながら、そのプロセスを見ていくことにしよう。

ボヘミア領邦のドイツ系多数地域で初めてのソコル協会が設立されたのは、1883年、北西ボヘミアのドゥフツォフにおいてである[24]。その後、86年に北ボヘミアのリベレツ (Liberec, Reichenberg) など、散発的に協会が設立されていくが、こうしたドイツ系多数地域をゲルマン化の危険にさらされた「閉鎖地帯 (uzavřené území)」と位置づけ、その地域に住むチェコ系住民を体系的に支援していこうとする視点は —— 少なくともソコル運動に関する限り —— 依然として欠如したままであった。

ところが、1896年夏に機関誌『ソコル』において、「ドイツ化された地域」の状況を紹介する記事が初めて掲載され、当該地域に存在する26協会の一覧が紹介されたのであった。この記事を執筆したクカニは、ドイツ系多数地域を以下のように規定している[25]。

> ……いわゆる「閉鎖地帯」—— かつては完全にチェコの土地であった時期にドイツ人によってそのように名付けられた地域であり、白山の戦い以降の17、18世紀に強制的にドイツ化された地域 —— においては、今やたくさんのソコル協会が根を張っている。そこでは赤白の旗が高く掲げられることによって、その地域がチェコ人の故郷であり、フュグネルとティルシュの精神が、チェコ人のすべての層だけでなく、こうした「ドイツの」地域にも浸透していることが示されている。……こうした地域におけるソコル会員の役割は極めて重要である。彼らはネイションの利益を守る歩哨であり、ゲルマン (Germánstvo) が衰退した場合には、この地をチェコの手に取り戻す役目を担っているのである。

23　*Dodatky*, vol.3, part 2, p.958（前注21参照）．なお、クカニは、1897年4月に設立された反セム組織、ネイション防衛 (Národní Obrana) の主要メンバーの一人でもあった。Michal Frankl, “The Background of the Hilsner Case: Political Antisemitism and Allegations of Ritual Murder 1896-1900,” *Judaica Bohemiae* 36 (2001), p.68.

24　V. Kukaň, “Sokolské jednoty v území poněmčeném,” *Sokol* 22:10 (1896), pp.195-198.

25　Kukaň, “Sokolské jednoty,” p.195（前注24参照）.

この記事が機関誌『ソコル』に掲載されてから数日後、ドゥフツォフ支部の炭坑夫から一通の手紙がソコル執行部に届いたのであった(26)。この炭坑夫とは、本稿の冒頭で紹介したプロハースカである。彼は、ドゥフツォフなどクルシュノホルスカー地区に居住するソコル会員が「貧しく、働き過ぎで疲れ切った炭鉱夫や労働者ばかりである」ことを指摘し、そうしたチェコ系少数派の「窮状」にもっと関心を持ってもらえるよう要請したのであった。

プロハースカの指摘を重要視したソコル執行部は、同年10月11日にドゥフツォフにて協議を行い、クルシュノホルスカー地区代表との意見交換を行っている(27)。会場に集まってきたのは当地区に所属する17協会のうち13協会、計150名ほどの会員であった。三時間半にわたる話し合いの中で、以下の諸点、すなわち、1．ドイツ系住民のソコルに対する態度、2．チェコ知識人の態度、3．「インターナショナル (internacionála)」の状況、4．練習場所の問題、5．体操器具の有無、6．図書室の状況、7．講演会などの開催状況、が議題として取り上げられている。

このヒアリングにおいて、ソコル指導部は、チェコ系少数地域における貧弱な練習場所、器具や蔵書の不足といった物質的な問題点の存在を確認していくわけであるが、むしろここで注意すべきなのは、「インターナショナル」の問題であろう。この場に同席したソコル会員の多くが、「インターナショナル」、すなわち社会民主党によってソコル運動が阻害されていると発言しているのである。その意味については、次節において考えていくことにしよう。

3.2　社会主義勢力との対立

図：チェコ諸領邦におけるソコル協会の分布（1901 年）

出典：*IV slet Všesokolský v Praze 1901* (Praha, n.d.), n.p.

26　V. Kukaň, *Sokolstvo a jeho činnost menšinová (1896-1921)* (Praha, 1922), pp.12f.
27　V. Kukaň, “Na půdě ohrožené (I),” *Sokol* 22:16 (1896), pp.321-323.

ドイツ系多数地域において設立されたソコル協会の分布図（1901年）を見れば分かるように、ボヘミア、あるいはチェコ諸領邦のすべての地域にソコル運動が拡大していたわけではない。農村地域であるボヘミア南部において設立されたソコル協会の数はわずかであったし、チェコ語話者が極端に少ないボヘミア西部においては、チェコスロヴァキアの独立後まで協会が設立されなかった地域がほとんどであった[28]。実際のところ、第一次大戦前のドイツ系多数地域において設立されたソコル協会の多くは、急速な産業発展を経験したボヘミア北部の繊維工業地域や北西部の褐炭地域に集中していたのである[29]。

表：北西ボヘミアの炭坑地域・主要三郡の人口統計[30]

	1880		1890		1900		1910		1921	
	ドイツ系	チェコ系	ドイツ系	チェコ系	ドイツ系	チェコ系	ドイツ系	チェコ系	ドイツ系	チェコ系
モスト (Brüx)	86.31	13.68	74.42	25.57	68.73	31.25	72.17 (75,342)	27.81 (25,056)	52.77	46.47
テプリツェ・シャノフ (Teplitz-Schönau)	94.77	5.21	93.95	6.05	89.65	10.35	87.05 (86,679)	12.91 (12,851)	76.70	22.70
ドゥフツォフ・ビーリナ (Dux-Bilin)	88.82	11.18	86.75	13.25	82.88	16.99	73.99 (61,572)	25.74 (21,420)	61.17	38.62

・数値はパーセンテージ。ただし、1910年における括弧内の数値は絶対値。
・1880年から1910年までは「日常語 (Umgangssprache)」を基にした統計、1921年は「民族意識」を基にした統計である。

こうした工業地域、とりわけ後者の北西ボヘミアは、1880年代から1900年代にかけて大量のチェコ系労働者が流入した地域であり、ドイツ人とチェコ人の「主戦場」と化した場所でもあった。表を見れば分かるように、この地域において、チェコ語話者の割合が急激に増加している点は明らかである。もちろん、絶対数としてはドイツ系労働者の方が多かったが、インパクトを持っていたのはチェコ系労働者 —— 正確にはチェコ語を話す労働者 —— の存在であった。彼らは、ドイツ系都市の近郊に固まって居住し、チェコ語だけが話される独自の空間をつくりだしていったのである。ソコルの少数派支援は、主としてこうした地域の労働者をターゲットとしていたと言えよう。

28　戦間期のドイツ系多数地域におけるソコル運動の拡大については以下を参照。*Sport a tělovýchova v pohraničí: Sportovní almanach* (Liberec: Vydavatelství Vojtěch Talík, 1946).

29　ボヘミア北部、および北西部における経済発展、人口移動、階級対立については以下の文献を参照。Kořalka, *Češi v habsburské říši*, pp.228f.（前注15参照）; Havránek, "Češi v severočeských a západočeských městech"（前注18参照）; Hans Mommsen, *Die Sozialdemokratie und die Nationalitätenfrage im habsburgischen Vielvölkerstaat*, vol.1: *Das Ringen um die supranationale Integration der zisleithanischen Arbeiterbewegung (1867-1907)* (Wien: Europa Verlag, 1963), pp.17-45; Jaroslav Bakala, "Průmyslová oblast severozápadních Čech a národnostní zápas v letech 1848-1896," *Slezský sborník* 76:4 (1978), pp.262-285; Marlis Sewering-Wollanek, *Brot oder Nationalität?: Nordwestböhmische Arbeiterbewegung im Brennpunkt der Nationalitätenkonflikte (1889-1911)* (Marburg: Herder-Institut, 1994); Ludmila Kárníková, *Vývoj obyvatelstva v českých zemích 1754-1914* (Praha, 1965), esp. pp.216-254; オットー・バウアー著、丸山敬一他訳『民族問題と社会民主主義』御茶の水書房、2001年、209頁以降。

30　Bruce M. Garver, *The Young Czech Party 1874-1901 and the Emergence of a Multi-Party System* (Yale University Press, 1978), p.327.

また、こうした工業地域におけるネイション対立は、階級対立としての側面も有していたのであった。チェコ系労働者たちは、ドイツ語圏に「同化」されることなく、チェコ語話者のまま、ドイツ語話者である資本家と対峙することになったために、階級対立とネイション対立の要素が重なり合う余地が生じたのである。すなわち、ドイツ人（＝資本家）とチェコ人（＝労働者）の対立という構図である。本稿の冒頭で掲げたように、「脅かされた地域」のチェコ人がドイツ人によって「搾取されている」というソコル指導者シャイネルの演説は、こうした事情を反映していたのであった。そして、その背景には、チェコ社会内部における「ブルジョア政党」の青年チェコ党と社会民主党との対立が存在していたと言えるだろう。つまり、チェコ人をドイツ人の「搾取」から守るという言説には、チェコ系労働者を「インターナショナル」に奪われまいとする青年チェコ党の思惑が絡んでいたのである。実際、1890年代より、ボヘミア各地では社会民主党系の労働者体操団体が設立されはじめており、青年チェコ党と密接な関係を持つソコルとの対立が生じていたのであった。

そして、1896年6月の選挙改革により、部分的とはいえ、帝国議会に男子普通選挙が導入された点も重要であった。大土地所有者、商工会議所、都市、農村という既存の四つのクーリエに加えて、男子普通選挙で選出される第五クーリエが新たに導入されたことにより、青年チェコ党は社会民主党と議席をめぐって直接対峙することとなったのである。それまで、党内に親社民的な勢力を抱えていた青年チェコ党は、社会民主党に対して鷹揚な態度を取ってきたが、第五クーリエの出現により、同党に対する警戒心を強めていったのである。翌年3月に行われた帝国議会選挙では、青年チェコ党は第五クーリエに大衆的な人気を持つ候補者を揃えることによって、社民党の躍進を防ぐことにかろうじて成功したが[31]、両者の対立はすでに決定的なものとなっていたと言えるだろう。そうした文脈の下、ソコルも「インターナショナル」に対抗するために、チェコ系少数地域における労働者の「囲い込み」に力を入れるようになったと推測されるのである。

4．禁止された二つの祭典

ソコルによる本格的な少数派支援が1896年に開始された要因として、前章では社会主義勢力との対抗関係を挙げたが、それ以外にも、同年春の聖霊降臨祭に予定されていた二つのソコル祭典が禁止措置を受けた、という点を挙げておく必要があるだろう。一つは、北西ボヘミアのテプリツェ (Teplice, Teplitz)[32]において企画されたソコル祭典であり、もう一つは、南部ボヘミアのフシネツ (Husinec, Husinetz) からプラハティツェ (Prachatice, Prachatitz) に向けて予定されていた遠足であった。これら二つのイヴェントが当局によって禁止された直後に、ソコルの機関誌においてチェコ系少数派の状況を知らせるクカニの記事が掲載され始めたことを考えると、両者の間に何らかの相関関係があると推測することは可能であろう。

31　Garver, *The Young Czech Party*, pp.235-236（前注30参照）.

32　テプリツェ市は1895年に近郊のシャノフ (Šanov, Schönau) と統合されて、テプリツェ・シャノフ市 (Teplice-Šanov, Teplitz-Schönau) となっている。

4.1　テプリツェにおける祭典

まずは北西ボヘミアのテプリツェの事例を見ていくことにしよう。この街は、もともと温泉街として有名な都市であり、19世紀末の時点においても年間6千名程度の湯治客がこの街を訪れていたという(33)。だが、1870年代に始まった急速な産業化により、街の風景は一変した。世紀転換期においては、テプリツェは「煙突が立ち並ぶ工場都市」(34)へと変貌していたのである。また、流入する労働者の多くが、市の郊外や近郊の自治体に住むようになったが、その中には多数のチェコ語話者が含まれていたことから、市の中心部よりも周辺部においてチェコ語話者の比率が高くなる、という現象が発生している。実際、1900年当時のテプリツェ市内では、人口24,420名のうちチェコ語話者が1,548名 (6.3%) であったのに対し、郡 (okres, Bezirk) 全体では、78,136名のドイツ語話者に対して9,018名 (10.3%) のチェコ語話者となっている。こうした言語構成の変化は、テプリツェだけでなく、急激な産業化を経験したドイツ系諸都市において共通してみられたものであった。

そのテプリツェにおいてソコル協会(クルシュノホルスカー地区所属)が設立されたのは1894年である。当時、この街にはチェコ社交クラブ(Česká beseda)や合唱団、中央学校財団の支部、北ボヘミア・ネイション協会の支部といったチェコ系の結社が存在していたが、ドイツ系社会にとって最大の「脅威」とされたのは何と言ってもソコルであった。そのソコルが、1896年の聖霊降臨祭の時期にクルシュノホルスカー地区主催の祭典を企画したときには、ドイツ系ジャーナリズムは「生粋のドイツ都市」テプリツェを脅かすものとして一斉に批判し始めたのである。

なお、テプリツェの郡長官 (Bezirkshauptmann) によって許可された祭典の日程は以下のとおりであった(35)。

・5月23日（土）
　駅にてゲストの出迎え。午後8時よりステーション・ホテルにて歓迎会。
・5月24日（日）
　午前6時より競技会。9時半より集団体操のリハーサル。11時半よりステーション・ホテルにて昼食、ソコル会長、J. ポドリプニーによるスピーチ。午後4時よりソコル・クルシュノホルスカー地区のメンバーによる公開体操。午後7時よりステーション・ホテルの庭園にて野外コンサート。演奏はプラハ・ソコル所属の合唱団とコリーン・ソコル所属のブラスバンド。
・5月25日（月）
　午前7時より近郊の山への遠足。山頂にて昼食。午後8時よりステーション・ホテルにて夕食会。

当初の計画では、プラハなどからやって来るソコル・メンバーを含め、約2千名の会員が、ソコル・ユニフォームである赤いシャツを着て、テプリツェの中心部を行進する予定に

33　*Ottův slovník naučný* (Praha, 1888-1909), vol.25, pp.229f.

34　V. Kukaň, “Na půdě ohrožené (VII),” *Sokol* 23:6 (1897), pp.140-142.

35　*Slet župy Krušnohorské v Teplicích* (Teplice, n.d.), n.p. なお、祭典の許可をめぐって郡長官、プラハの総督府、ウィーンの内務省の三者間で交わされた行政文書については以下の資料を参照。SÚA, PM, 1891-1900, Inv.č.9101, Karton 2522, Sign. 8/5/20/1 (1896/Teplitz): ad Z. 155 praes., Teplitz, am 13. April 1896; 2410/ M.I., Wien, am 19. April 1896; ad Z. 168 prs., Teplitz, am 21. April 1896; Z.195 praes., Teplitz, am 2. Mai 1896; 2731/ M.I., Wien, am 6. Mai 1896; 2958/ M.I., Wien, am 11.Mai 1896; Z. 242 praes., Teplitz, am 3. Juni 1896; Z. 246 praes., Teplitz, am 5. Juni 1896.

なっていたが、郡長官の命令により中止されたのであった。だが、これだけではドイツ人側の反発は収まらず、彼らは、ソコル祭典と全く同じ日程で春祭り (Frühjahrsfest) を企画し、郡長官に開催許可を申請したのである。チェコ人とドイツ人の双方が祭典を企画した場合には「両者痛み分け」でどちらも不許可にされる、という読みがそこにはあったのだろう。が、結果として、郡長官は、テプリツェ市長や経済界の有力者、あるいはプラハ総督と綿密な交渉を行い、最終的に両者の申請を許可したのであった。ところが、思いがけない出来事により、その許可は撤回される。

その出来事とは、皇太子カール・ルードヴィヒの死去（5月19日）であった。その翌日、郡長官は「特別な事態」を理由にソコル祭典に対する許可を撤回し、その中止を命じたのである。

この件に関してチェコ人議員がウィーンの帝国議会で政府質問 (Interpellation) を行い、異議を申し立てている。当時の首相バデーニは、当局の禁止措置はチェコ人に対する「嫌悪感 (Animosität)」が原因ではないと弁明している(36)。彼の説明によれば、皇太子の死去が報じられてすぐにドイツ人側が春祭りの「自粛」を発表したことから、ソコル祭典だけを開催させるのは不都合だと当局が判断したのであった。ルートヴィヒの死去が聖霊降臨祭の直前であったということもあり、テプリツェ市民の大半はドイツ人側の「自粛」に気づかないかもしれない、と考えたのである。そんな時に、ソコルだけが祭典を行えば、自分たちが「不当」に扱われたと感じたドイツ人たちが問題行動を起こす可能性もある。そう考えた当局は、「やむを得ず」ソコル祭典の許可を撤回したのである。これがバデーニの説明であった。

6月に入ると、ソコルは再び体操祭典を企画、それに対抗してドイツ人側も体操祭典の開催を当局に申請し、テプリツェの郡長官によって共に許可されたのであった。ところが、双方のマスメディアによる宣伝合戦が過熱したことから、祭典の二日前になって双方の開催許可が取り消されたのである(37)。直接の原因となったのは、青年チェコ系の新聞である『ナーロドニー・リスティ』が、ソコル祭典を「ネイション意識を表明する輝ける場」と位置づけたことであった。事態を重く見たボヘミア総督は、双方の祭典が純粋な体操運動の枠内を越えて政治化したという理由で、首相のバデーニと電話で相談の上、禁止措置をとったのである。

4.2 プラハティツェへの遠足

次に、ボヘミア南部の都市、プラハティツェに向けて企画されたソコル遠足を見てみることにしよう(38)。

---

36 *Stenographisches Protokoll: Haus der Abgeordneten*, XI. Session, 500. Sitzung, am 21. Mai 1896, Interpellation des Abgeordneten Schwarz und Genossen an den Ministerpräsidenten als Leiter des Ministeriums des Innern, betreffend das Verbot der Sokolfeier in Teplitz—Beantwortung durch den Ministerpräsidenten und Leiter des Ministeriums des Innern Dr. Grafen Badeni (vol.20, pp.25329-25330).

37 *Stenographisches Protokoll: Haus der Abgeordneten,* XI. Session, 509. Sitzung, am 13. Juni 1896, Verhandlung des Dringlichkeitsantrages des Abgeordneten Dr. Herold und Genossen, betreffend das Verbot des Sokolfestes in Teplitz, (vol.20, pp.25953-25976), p.25961.

38 SÚA, PM, 1891-1900, Inv.č.9101, Karton 2522, Sign. 8/5/20/1 (1896/2): Nr. 163 pras., Prachatitz, am 25. April 1896; Nr. 176 pras., Prachatitz, am 5. Mai 1896; Nr. 181 pras., Prachatitz, am 13. Mai 1896; Z. 13083, Prachatitz, am 13. Mai 1896 [quoted in "Dva zákazy," *Sokol* 22:7 (1896), p.158]; Nr. 198 pras., Prachatitz, am 22. Mai 1896; 3615/ M.I., Wien, am 10. Juni 1896; Nr. 244 pras., Prachatitz, am 23. Juli 1896.

シュマヴァ (Šumava, Böhmerwald)と呼ばれる山林地帯の入り口に位置するこの街は、他の南ボヘミアの都市と同様、周りをチェコ系住民に取り囲まれたドイツ系住民の「言語島(Sprachinsel)」であった。この地域では産業化があまり進んでおらず、アメリカへの移民など、他地域への人口流出が生じていたために[39]、北西ボヘミアのような深刻なネイション対立は発生していなかったが、もちろんそれは、この地域が19世紀末におけるチェコ人＝ドイツ人の対立と無縁であったことを意味するわけではない。また、程度の差こそあれ、この地域にもソコル運動は波及しており、それがドイツ系住民との関係を悪化させる一つの要因として働いていたのである。

ことの起こりは、1896年4月23日、青年チェコ党の議員が帝国議会で行った政府質問であった。それによれば、南ボヘミアに本拠を持つソコル・フス地区 (Župa Husova) が、聖霊降臨祭にあたる5月24日にプラハティツェへの遠足を計画しているものの、「信頼できる情報」によれば、その申請が却下される見込みだというのである。当然のことながら、政府質問の主旨は、その却下が不当だというものであった。

この件を知って一番驚いたのは、プラハティツェ郡長官本人であったかもしれない。というのも、この時点においては、ソコルによる遠足の申請は、郡長官のところには提出されていなかったからである。実際に申請書が提出されたのは5月3日であった。

郡長官の推測によれば、ソコルの遠足は、4月23日に許可されたドイツ系合唱団の祭典を妨害するために企画されたものであった。聖霊降臨祭にあたる5月24日と25日には、プラハティツェ、ボヘミア西部のプルゼニ (Plzeň, Pilsen)、およびウィーンの合唱団が共同で男声合唱祭 (Liedertafelfest) を行う件がすでに認められており、それと重なる形でソコルの遠足が設定されたのである。このように、一方の企画を妨害するためにわざと別の企画をぶつける、という行為がどの程度行われたのかは明らかではない。だが、内務省文書を見る限り、実際に祭典を行う意思があるかどうかに関わらず、他方の企画を妨害するために申請書を提出する、ということが頻繁に発生したようである。

いずれにせよ、ソコルの申請により、プラハティツェ郡長官は難しい立場に置かれたのであった。もとよりプラハティツェは路地が入り組んだ小都市であり、中心のリング広場以外に多人数が集まる場所はないところであった。そのような街に、ドイツ系の合唱団とチェコ系のソコルが集結すれば、問題が発生するのは眼に見えていた。結局、ドイツ人が先に申請したという理由で、郡長官はソコルの遠足申請を却下したが、そのこと自体、決して不当な判断ではない。

ところが、チェコ人側はそれで納得せず、同年6月2日、再度の政府質問が青年チェコ党議員によってなされたのであった。それに伴い、ウィーン内務省がプラハのボヘミア総督府に対し、この件に関する再調査を行うように命じたため、プラハティツェ郡長官は、再度、報告書を書く羽目に陥ったのである。

この章で挙げたテプリツェでの祭典とプラハティツェの遠足は、共に禁止されたとはいえ、その理由は全く異なるものであった。特に、後者はチェコ人側の確信犯的な行為によって引き起こされたものであり、当局に落ち度があったというものではない。だが、当局によってチェコ人の申請が却下されたという事実のみがソコルの機関誌において報道され、「チェコ

39　Antonín Hubka, *Naše menšiny a smíšené kraje na českém jihu* (Praha, 1899), pp.147-148.

人が不当に扱われている」ことの「証拠」として用いられるようになったのであった。そして、このことがソコルによる本格的な少数地域支援へとつながっていったのである。

5.「脅かされた地域」へのソコルの進出

5.1　クカニの語り ―― ネイションの地平

ソコルにおける少数派支援の第一人者であったクカニは、「脅かされている」チェコ系少数地域への旅を百回以上行い、各地におけるチェコ人の状況を機関誌『ソコル』において詳細に報告している。その記事には、大多数の読者にとってあまりなじみのなかった地方の情報が多数含まれていたであろうし、クカニによる大げさな表現や事実の歪曲が含まれていたのかもしれない。だが、ここで重要なのは、そうしたローカルな問題をネイション全体に関わる問題として捉え直そうとする見方である。何度もチェコ系少数地域を旅する内に、それらの地方がクカニにとっては見慣れた風景となり、最後にはそこが昔からのチェコ人の土地であるという確信に変わっていく(40)。そして、その確信が、ソコルの機関誌において繰り返し、読者に発信されるわけである。すでに見たように、こうしたドイツ系多数地域におけるネイション同士の対立は、急速な経済発展に伴って発生した階級対立が形を変えて表れたものであったのかもしれない。また、1890年代後半における青年チェコ党と社会民主党の党派的な対立が、クカニの語りに影響を与えていたとも考えられよう。だが、このような形でネイションの問題が定式化され、語られていくことにより、「我が同胞」が「ゲルマン化の危険」にさらされているというイメージがソコル運動の中で固定化していったのである。

また、興味深いのは、急速に経済発展が進んだボヘミア北西部の炭坑地域であれ、農村地域のボヘミア南部であれ、すべてのチェコ系少数地域が、「我が同胞」が実際に居住している「祖国」の一部として同列に論じられている、という点である。先にも述べたように、階級分化が進んだ社会とそうでない社会との間では、ドイツ系住民とチェコ系住民の対立には大きな差があったし、両ネイションが混住するに至った歴史的な経緯も異なっていたはずである。だが、モラヴィアやシレジアも含めたクカニの巡礼は、そうした差異を平準化する旅として描かれていくのであった。彼は、どの地域に行ったときにでも、その土地をチェコ人の「祖国」の一部と規定し、「ゲルマンの手」から救い出すべき存在と捉えたのである。クカニの語りにおいて、チェコ諸領邦は「チェコ人の土地」という統一的な観点によって捉えられる、いわば均質的な空間としてイメージされる世界へと変貌していくのであった。

一例として、4章2節でも言及したプラハティツェに対するクカニの語りを紹介しておくことにしよう(41)。

1900年の国勢調査によれば、プラハティツェには941名のチェコ人と3,334名のドイツ人が居住しているはずであった。だが、クカニによれば、この調査では、チェコ人の数が「不当に低く」見積もられているのであった。どのドイツ系多数地域においてもそうであるように、ここプラハティツェにおいても、ドイツ系の大家や工場主が、チェコ系の借家人や労働者に対して圧力をかけ、日常語としてドイツ語を使うと答えさせているというのである。ま

40　例えば以下の記事を参照。V. Kukaň, “Na půdě ohrožené (XVIII),” *Sokol* 26:2 (1900), pp.37-39.
41　V. Kukaň, “Na půdě ohrožené (XXV),” *Sokol* 28:11 (1902), pp.254-257.

た、チェコ語を教育語とする学校がこれ以上増えないように、ありとあらゆる策略が行われているのであった。しかも、本来ならばこの地には必要ないはずのドイツ系ギムナジウムが、プラハティツェのゲルマン化を進めるというだけの目的で設立され、立派な校舎が建てられたのであった。クカニの言葉によれば、この学校には「分別を失わされた」チェコ系の子供が多数通っているのである。

しかしながら、とクカニは続ける。プラハティツェは元々スラヴのものであったはずである。現在、ドイツ系と見なされている人の中にも、数多くのチェコ系の名前を見いだすことができるからである。また、この地域で使われているドイツ語の中にも、「チェチケン」(レンズ、原語は čočka)、「カプスン」(ポケット、原語は kapsa)、「シェバス」(〜にもかかわらず、原語は třebas)といったチェコ語起源の単語が多数見いだされる。これらはいずれも、プラハティツェに住むドイツ系住民の多くが、元々チェコ系であったことを示す「証拠」なのである。

そして、クカニは、プラハティツェにおけるチェコ人の「覚醒運動」へと話を進めていく。1880年代からこの街にも、チェコ系多数地域からの支援が行われるようになり、チェコ語を教育語とする私立学校が設立され、チェコ社交クラブやソコルといった結社も設けられるようになった。また、1902年には、街の中心部であるリング広場に待望のナーロドニー・ドゥームが建設され、チェコ系の団体が自由に使える場所ができたのであった。チェコ人はもはや、ドイツ人の眼を気にしながら、ドイツ系の建物の中で密やかに活動する必要はないのだという。

最後に、クカニは以下のような言葉で文章を締めくくった。「古いスラヴの街、プラハティツェが一刻も早くチェコ・ネイションの手に戻ってくることを望んでいる」。1860年代初頭には、老チェコ党のリーゲル (František Ladislav Rieger) がドイツ的地域と見なした[42]この都市を、クカニは、歴史的な意味とエスニックな意味の双方においてチェコ的な都市として位置づけたのである。

では次に、チェコ・ネイションの空間をドイツ系多数地域を包摂するものとして想像するために、ソコルが具体的に何をしたのか、という点について見ていくことにしよう。

5.2　公共空間の構築 —— 体育館とエリート

チェコ系少数地域のソコルにおいて第一の課題とされていたのは、チェコ人がチェコ人として生きることができ、仲間との結束を確認することができる場所、即ちナショナルな公共空間を構築することであった。

とはいえ、最初から独自の体育館を確保できるわけでもないため、初めは宿屋（兼居酒屋）(hostinec, Gasthaus) を借りて活動を開始することになる。だが、チェコ系の主人が経営する宿屋の数は少なかったし、ましてやチェコ系の結社に喜んで場所を提供してくれるドイツ系の宿屋は皆無であったという。たとえ、チェコ系の主人が経営している宿屋であり、チェコ系結社の活動に理解のある場所であったとしても、「周辺に遠慮して」ドイツ語の看板をつけ、チェコ語では看板をつけないところがほとんどであったらしい[43]。

42　Hubka, *Naše menšiny*, p.135（前注39参照）.
43　北西ボヘミアに位置するビーリナ (Bílina, Bilin) のソコルは、「ゲルマーニア (Gasthaus Germania)」とい

このような状況の中、各ソコル協会において、独自の体育館を建設しようという動きが発生する。だが、問題は土地と建設費用の確保であった。そもそも、ソコルのようにナショナリスティックな団体と見なされているような組織が少数地域で土地を獲得するのは大変なこととされていた。例えば、「うっかり」土地を売ってしまったドゥフツォフのドイツ人は、周辺のドイツ人に非難され、彼の自宅は「裏切り者の家」と呼ばれるようになってしまったという(44)。

また、土地を確保できたとしても当局による体育館の建設許可を得るのに苦労するのが常であったが、意外な理由で建設が認められるケースもあった(45)。例えば、北西ボヘミアのモスト (Most, Brüx) では、1897年に体育館用の土地をソコル本部の援助によって購入したものの、市当局からの許可がなかなか得られず、建設を開始できないでいた。ところが、ドイツ民族主義派 (Deutschnationale) が台頭したために、それを抑えようとするドイツ系自由派が、体育館の建設許可を条件に、1901年市選挙での選挙協力をチェコ系陣営に要請したのである。また、北ボヘミアのトゥルトノフ (Trutnov, Trautenau) でも、1897年の帝国議会選挙において、チェコ系陣営がドイツ系自由派に対抗する意味で当時はまだあまり知られていなかったドイツ民族主義派のヴォルフ (Karl Hermann Wolf) に投票し、当選させてしまったことから、ドイツ系自由派がチェコ系陣営に譲歩し、ナーロドニー・ドゥームの建設許可を与えたのであった。

一方、ソコル執行部では、少数地域における体育館の建設費用を援助するために、ネイション基金 (Národní Základ) を設けている。1896年以降、「ソコルの日」といったイヴェントにおいてこの基金への寄付が呼びかけられたものの、それでは不充分であったため、1899年以降、ソコルの会費を20ハレル値上げし、その分を当基金に充てたのであった。これにより、ネイション基金は恒常的な収入の手段を確保したのである(46)。

もちろん、ソコル単独で体育館を建設するだけでなく、中央学校財団 (Ú.M.Š) や各ネイション協会 (N.J.) と協力してナーロドニー・ドゥームを建設し、その中に体育室を設けるという手段も講じられた。例えば、先ほど挙げたトゥルトノフや南ボヘミアのプラハティツェで建設されたナーロドニー・ドゥームはその一例である(47)。

少数地域における第一の問題が場所の確保だとするならば、第二の問題は、少数派のチェコ人を導くエリートの確保であったと言えよう。だが、この点については、ソコルはあまり成功したとは言い難い。そもそも、チェコ系少数地域においては労働者の比率が高くエリートの絶対数が少ない、という事情もあったが、理由はそれだけではなかったようである。

第一に、エリートの中には、労働者の多いソコル運動を格の低いものと捉える傾向があった、という理由が挙げられよう。彼らは、ソコルをネイションにとって不可欠なものとは見

う名前の宿屋で練習を行っていた。V. Kukaň, “Na půdě ohrožené (IX),” *Sokol* 23:8 (1897), p.189. あるいはチェコ系の宿屋であっても、「体操家はあまりビールを飲まず、商売にならない」という理由で貸出を渋る場合もあった。Idem, “Na půdě ohrožené (VII),” *Sokol* 23:6 (1897), p.140.

44 V. Kukaň, “Na půdě ohrožené (VIII),” *Sokol* 23:7 (1897), pp.164-166.

45 “Tělocvična ‘Sokola’ v Mostě,” *Sokol* 28:8 (1902), pp.176-178; “Slavnostní otevření Sokolovny v Mostě,” *Sokol* 28:8 (1902), pp.185-186; V. Kukaň, “Na půdě ohrožené (VII),” *Sokol* 23:6 (1897), pp.138-140; Idem, “Na půdě ohrožené (XXI),” *Sokol* 27:1 (1901), pp.16-17.

46 Kukaň, *Sokolstvo*, p.25（前注26参照）.

47 Antonín Hubka, “Sokolská organisace a česká menšiny,” *Věstník Sokolský* 11:5 (1907), pp.118-119.

なさなかったのである。第二に、チェコ系の小売業者や資本家には、ドイツ系住民からの嫌がらせや不買運動を引き起こす危険を冒してまでソコルに肩入れする気がなかった、という点が挙げられる。実際、自分の名前をドイツ風のものに変え、ネイションとしての義務よりも「自らの保身に汲々とする」チェコ系経営者の存在が、クカニによってしばしば指摘され、批判されたのであった。第三は、エリートの中に社会主義的な傾向を持つ者が少なからず存在した、という点である(48)。彼らはネイションの価値を完全に否定していたわけではなかったが、絶対視する気にもなれなかったのであった。彼らにとっては、ソコルは過度にナショナリスティックなものだったのである。第四の理由は道徳上の問題であった。当時における労働者、とりわけ炭鉱労働者の生活環境は劣悪であり、肉体的な面だけでなく、精神的な面での荒廃も問題視されていたのであった。チェコ系少数地域におけるソコルは、往々にして環境の悪い宿屋を活動場所にせざるをえなかったが、それがエリートの嫌悪感を呼び起こしたのである。特に、子どもたちが宿屋で体操するのは問題であった。多くのチェコ人教師たちは、飲酒癖を覚えたり、道徳的に「退廃」したりするのを防ぐために、子どもたちがソコルに通うのを禁じたのである(49)。

5.3　チェコ系多数社会とのネットワーク —— パートナー制度

1897年3月、ソコル執行部は財政的に余裕のある協会に対し、ドイツ系多数地域、あるいは境界地域において「困窮している」協会に対する「支援者 (ochranitelka)」になることを要請している(50)。それに従って、「ドイツ化の危険」にさらされている各協会は、「支援者」とパートナー（一対一が原則）を組み、各種の援助を受けることとなる。距離的に近い協会同士がペアを組む場合もあったものの、実際には、他団体を援助するだけの力を持った協会が近くにない場合が多く、結果として、経済力のあるプラハ近辺の協会と「脅かされた」地域の協会、という組み合わせが多数設定されたのであった。もちろん、そうした距離的に離れたペアリングの場合、これまで接点がなかったというケースがほとんどであり、このパートナー制度を通して初めて、相互の交流が開始されたのであった。例えば、ボヘミア北西部にあるテプリツェ・ソコルはプラハ近郊にあるジシュコフ・ソコルとパートナーを組むことになったが、その組み合わせは偶然によるものであり、ソコル執行部の要請により、初めて両者の関係が生じたのである(51)。

ジシュコフ・ソコルがテプリツェ・ソコルに行った最初の支援は、蔵書の寄贈であった。「脅かされた」地域においては、チェコ語で教育を行う学校が不足しており、また、チェコ語の本に接する機会も限られていたことから、蔵書を寄付することは非常に重要なことと見なされていた。さらには、ジシュコフ・ソコルから送られてくる本の中には新聞や雑誌も含まれており、テプリツェに住むソコル会員は、「ゲルマンの海」にありながらも、プラハを中心とするチェコ社会の息吹を感じ取ることが可能とされたのであった。また、「チェコ語が読めない会員」のために、記事を読み上げる朗読会のようなものも行われていたと考えら

48　Ed. Štorch, “Sociální postavení dětí v severočeském revíru,” *Naše doba* 8 (1901), pp.500-501.
49　Štorch, “Sociální postavení dětí,” pp.415, 504-505（前注48参照）.
50　Václav Kukaň, “Na podporu sokolské a národní věci v krajinách ohrožených,” *Sokol* 23:1 (1897), pp.18-20.
51　*Padesát let Sokola v Žižkově* (Praha, 1922), pp.110-116.

れる(52)。

また、ジシュコフ・ソコルでは、1897年に少数派チェコ人を支援するための合唱サークルも設立されている(53)。そのメンバーは、全員ソコル会員であり、その大半が実際に体操を行う体操会員であった。翌98年に行われたボヘミア西部の町、ジャテツ (Žatec, Saaz) への遠征を始めとして、この合唱サークルは頻繁に演奏旅行を行い、チェコ系少数地域で開催されたソコルの行事に花を添えたのである。1922年までの25年間において、このサークルは、計224回のコンサートを行ったと記録されている。

1910年には、ジシュコフ・ソコルの発案により、「ソコル・クルシュノホルスカー地区に対する支援者の会 (Sbor ochranitelek sokolské župy Krušnohorské)」が創設されている。これは、ボヘミア北西部のクルシュノホルスカー地区に所属する協会とペアを組んでいる30のソコル協会が、共同して支援活動を行うために結成した組織であった。中でも、「支援者の会」が主催して行うボヘミア北西部への遠征は「目玉」であった。毎年一回から二回、二日間ほどの日程でクルシュノホルスカー地区の各協会を訪問していくのである。例えば、1911年の聖霊降臨祭に行われた第三回目の遠征では、ドゥフツォフ周辺に位置する13のソコル協会を訪問し、意見交換を行っている。また、夜には懇親会 (přátelská beseda) も行われ、ジシュコフ・ソコルに所属するブラスバンド(1907年設立)や合唱サークルが活躍したのであった(54)。

その他にも、ジシュコフ・ソコルのように「支援者」となった協会は、クリスマスの贈り物や体育館建設の支援を行い、大規模な祭典が行われる際には、相互に宿泊場所を提供したのであった。プラハなどのチェコ系多数地域に住むソコル会員は、こうした活動によって「脅かされた」地域に住むチェコ系会員と接触し、「ゲルマン化の危険」に敏感になることを期待されたのである。他方、支援される側のソコル会員も、プラハを中心とするチェコ社会との接触により、チェコ系多数地域との一体感を獲得するものと考えられていたのであった。

おわりに

ソコルによって「脅かされた地域」に対する組織的な支援活動が行われるようになったとはいえ、少数地域のチェコ語話者すべてがネイションとしての自覚を持ったわけではないし、チェコ系多数地域において、少数地域に対する広範な層の関心を呼び起こしたわけでもなかった。クカニは繰り返し、少数地域における「チェコ的なるもの」への関心の低さを指摘し、チェコ系多数地域においても、「脅かされた地域」から離れるほど「チェコ系少数地

52 例えば、ドゥフツォフから一時間あまり北西に向かったところにあるソコル協会では「交流集会 (přátelské dýchánky)」と呼ばれる朗読会が定期的に開かれていた。Václav Kukaň, “Na půdě ohrožené (VI),” *Sokol* 23:5 (1897), pp.115-116. ドイツ語を教育語とする学校に行くことを「強制」された子供の存在がクカニによって頻繁に指摘されている点を考えると、ここで言われている「チェコ語が読めない」というのは文盲を意味しているのではなく、初歩的なドイツ語なら読み書きできる会員のことを指しているものと思われる。

53 *Padesát let*, pp.116-118(前注51参照); “Z činnosti sok. pěv. kroužku ‘Žižkov’,” *Věstník Sokolský* 15:14 (1911), pp.389-391.

54 Fr. Kytler, “Zájezd do zněmčeného území,” *Věstník Sokolský* 15:12 (1911), p.327.

域に対する愛が薄まっていく」と嘆いていたのであった(55)。あるいは、ドイツ系多数地域においてソコル運動を担うエリートが不足していることにクカニが腹を立て、声を張り上げることもあったという(56)。また、既述のように、西ボヘミアなど、チェコ語話者がほとんど居住していない地域については第一次大戦の直前になってもソコル協会は設立されておらず、「チェコ人の土地」と明確に表現され得ない事実上の空白地帯も存在した。1903年以降には、モラヴィアやシレジアにもソコルの少数支援活動が拡大されているが、チェコ諸領邦全体に渡るチェコ人の一体感がどの程度、醸成されたかについても疑問が残る。「チェコの (český)」という形容詞は、第一次世界大戦が勃発した時点においても、チェコ諸領邦全体を指す言葉としては完全に定着していなかったからである。

もちろん、19世紀後半のチェコ社会において、ボヘミア国権に基づく歴史的領土は自明のものとして表象されていたし、その領域的共同体を構成するのはチェコ語に基づく言語集団であるという言説も成立していたと言えるだろう(57)。だが、ボヘミア、あるいはチェコ諸領邦を単位とする属地主義的な共同体とチェコ語という言語に基づく属人主義的な共同体の接合は、ドイツ語に基づく言語集団の位置づけを困難なものにするという点で、重大な問題をはらんでいた。そして、その問題性が最も先鋭な形で表れたのがドイツ系多数地域であったと言えよう。当時のチェコ・ナショナリズムに内包されていた歴史的要素と言語的要素の結合は、論理的には、この地域に居住するドイツ系住民をチェコ社会から排除する可能性を持っていたからである。その意味において、歴史的領土の隅々に至るまで属地主義と属人主義の結合を貫徹させようとする学校財団やネイション協会、ソコルの活動は、この地におけるドイツ語集団の存在を否定する傾向を有していたのであった。

本稿においては、体操団体のソコルに着目し、そこからドイツ系多数地域の表象のされ方について考察してきた。もちろん、この組織がチェコ社会における最大の結社であったとはいえ、それだけで当時における潮流のすべてを捉えることは不可能であろう。だが、社会の一部であったにせよ、その中において「我が祖国」をめぐる言説の質が変化したという点は重要である。歴史的領土と規定されながらも、チェコ系多数地域とは実質的には関係を持たなかったはずのドイツ系地域が、ソコルの機関誌においてクローズアップされ、チェコ人にとって「なじみ深い土地」として紹介されていったこと。そして、当該地域における「同胞」の存在が指摘され、彼らとチェコ系多数地域との連帯感を生み出すべく、様々な活動が行われたこと。こうした過程の中で、ボヘミア、そしてチェコ諸領邦という空間が、具体的なイメージを持った「我が祖国」として想像されようとしていたのである。言うまでもなく、そのプロセスは単線的なものではありえなかったし、少数派支援の「功労者」であったクカニ本人にしても、その点をはっきりと自覚していたわけでもない。だが、ソコル運動において発生した一連の動きは、「我が祖国」のイメージに変化をもたらす要素を確かに持っていたのであった。本稿において指摘されるのはこの点である。

55　Václav Kukaň, “Světlo a stín v naší menšinové činnosti,” *Věstník Sokolský* 15:6 (1911), p.135.
56　Štorch, “Sociální postavení dětí,” p.500（前注 48 参照）.
57　Cf. Otto Urban, “Die tschechische Frage um 1900,” *Österreichische Osthefte* 32:3 (1990), pp.427-438.

Imagination of "the Homeland": The Sokol Movement in Predominantly German Districts in Bohemia before World War I

FUKUDA Hiroshi

The gymnastics club Sokol (Falcon in Czech), which grew to become the biggest association in Czech society before World War I, extended their range of activity into predominantly German districts from the end of the 19th century, and began to actively organize the Czech minority in those districts. In this process, predominantly German districts were depicted as "an area threatened by the danger of Germanizing," and the Czech minority was treated as "fellow countrymen who should be rescued." With an eye on this Sokol activity, the following two issues will be considered in this paper. The first is the question of why the Sokol club developed a serious interest in predominantly German districts at that time. The second issue is the methods in which Sokol has tried to produce a sense of solidarity between Czech people in predominantly German districts and that in Czech districts centering in Prague.

It was at the first half of 1880's that Sokol began to have influence in predominantly German districts, which would be named "Sudentenland" later, as well as the Central School Foundation (Ústřední Matice školská) and National Unions (Národní Jednoty), aiming at support of the Czech minority. But it was only after the year 1896 that the "plight" of the Czech people in predominantly German districts began to be frequently introduced in the club's organ, and Sokol began an active campaign to support the Czech minority.

Two factors are thought to be responsible for this situation. The first factor is an event in which the authorities forbade both a Sokol festival in Teplice (northwest Bohemia) and a Sokol excursion to Prachatice (southern Bohemia) planned for the spring Pentecost in 1896. The context in which these two festivals came to be forbidden was not the same, and their prohibition was not a result of "harassment" to the Czech minority, either. As a result, however, these two cases were recognized as important by the Sokol leaders, and they induced these leaders to begin a series of support campaigns targeted at the Czech minority in predominantly German districts.

Moreover, it is necessary to also mention as the second factor that the confrontation between the Young Czech Party, which had a close relation with Sokol, and the Social Democratic Party was aggravated. Since the fifth curia, which was the universal male suffrage section of the Reichsrat, was newly established by the electoral reform in June 1896, both parties came to confront each other directly in canvassing for votes in this curia. Important to note is the fact that the Czech minority supported by Sokol was mainly laborers in the industrial area. Thus, it is clear that Sokol's campaign had a strong linkage with the trial of the Young Czech Party, which tried to protect the laborers from the so-called "International."

In answer to the question of how the Sokol actually supported the Czech minority, the following three points are important. (1) Sokol founded as many of their own branches as possible in predominantly German districts, and increased public awareness of the existence of the Czech nation in the concerned area through events like gymnastic festivals and excursions, (2) they created public arenas such as gymnasiums, and trained a Czech elite that could lead public activities among the Czech nation, and (3) they created a sense of solidarity in the Czech nation through interchanges between branches in Czech districts with those in predominantly German districts. With such activities Sokol has tried to create an image of "the homeland," which included predominantly German districts, but was constituted exclusively by Czech speaking people. In other words, this could also be seen as an attempt to unite the personality principle (Personalitätsprinzip), classified by language, with the territorial prin-

ciple (Territorialprinzip), which falls under the historical sphere.

It could be said that two vectors have always been included in Czech nationalism. One vector was directed to the historicity of Bohemia or Czech lands. The other emphasized the ethnic side, like the Czech language. But the more the territorial community overlapped with the personality community, the more the Germans' (German speaking people) position in Czech society became problematic. The inconsistency of Czech nationalism must have appeared in the most severe form just in predominantly German districts. Although the scope of research in the current paper is limited to a discussion of the association known as Sokol, it is the feeling of the author that this discussion could offer a new perspective on such problems.